

# 鹿児島県立鹿児島水産高等学校

## 高校生がTSUNAGU南さつまの海 ～おとひめの結プロジェクト～

### 1 学校の概要

#### (1) 沿革

明治43年、鹿児島県立商船学校に水産学校規程本科程度による水産科を併置し、その名称を鹿児島県立商船水産学校と変更の件が認可された。その後、鹿児島県立商船水産学校水産科を県立薩南工業学校枕崎分校造船科と合併し、県立枕崎造船水産学校となる。昭和46年現在の新校地へ全面移転し、昭和61年、海洋科（海洋技術・機関・栽培工学コース）、情報通信科、食品工学科を新設、現在に至っている。

#### (2) 本校の特色

本校は本県唯一の海洋・水産の専門高校（水産系学科を有する高校は全国で46校、うち単独校は25校）であり、110年を越える歴史と伝統（1910年創立）をもっている。

各種国家試験や資格取得に力を入れ、その合格状況は全国水産高校の中でトップクラスであり、本科卒業後、さらに上級の資格を取得し、スペシャリストを目指すための専攻科を設置している。

#### (3) 学科構成・定員（令和6年1月現在）

ア 海洋科(40名)：2年生で選択(海洋技術コース・機関コース・栽培工学コース)

イ 情報通信科(40名)

ウ 食品工学科(40名)

エ 専攻科〔海洋技術コース・機関コース・情報通信科を卒業した生徒が進む2年課程で、さらに上級の資格取得を目指す(海洋技術科7名・機関技術科8名・情報通信科15名)〕

#### (4) 生徒数

ア 本科：海洋科119名、情報通信科109名、食品工学科79名（本科生計307名）

イ 専攻科：海洋技術科8名、機関技術科14名、情報通信科10名（専攻科計32名）

ウ 総計339名

#### (5) 施設・設備の特色

ア 校地が広く(17万㎡)第2グラウンドを有し、緑に囲まれた学習環境である。

イ 普通教室は空調が整備されている。

ウ 各学科の実習設備が充実している。

(ア) 大型実習船「薩摩青雲丸(699トン)」を有し、太平洋でマグロ延縄漁業実習や航海・機関当直実習等を行う。

(イ) 小型実習船「拓青(19トン)」を有し、南西諸島・奄美近海でカツオ釣り実習・潜水実習などを行う。

- (ウ) レーダARPA・操船シミュレータ，機関シミュレータの設備がある。
  - (エ) 栽培工学施設・設備(飼育水槽・水中ビデオカメラなど)が充実している。
  - (オ) 食品実習棟には，5Mバキュームシーマーを備え，様々な缶詰製造を行っている。
- エ 自宅通学が困難な生徒のために，青雲寮(男子寮，定員88名)と民間運営のつばみ寮(女子寮，定員20名)が整備されている。

## 2 事業の概要

### (1) 事業のねらいや目標

#### ア 地域の特色及び課題

本校海洋科栽培工学コースの生徒達は，ダイビング実習や水質分析実習を通して海の環境について体験的に学習している。近年では，地球温暖化の影響や海の砂漠化といわれる「磯焼け」の現象を目の当たりにし，郷土の海のために地元の水産高校として何かできることはないかと考えた。そのような中で，南さつま市がアマモ場の造成に取り組んでいることを知り，学んだことを生かして郷土の豊かな海づくりに協力したいと考えた。

アマモ場は，海洋において基礎生産を担う重要な役割を果たしており，それを守り，育てることは豊かな郷土の海を守ることに直結する。

さらに，豊かな海は私たちの生活を支え，生活の基盤が安定するとともに，地域への定住及び住民の新規参入につながる。

また，県内唯一の水産高校が地域と連携して，郷土の海の豊かさを知り，守り育て，さらに次世代につなごうとする取組でもある。地元の高校生が本事業をきっかけとして，鹿児島県の海について多方面から理解を深め，各種活動に取り組むことで，鹿児島県の豊かな海をPRし，その良さを県民にも知ってもらえる機会となる。このような取組が県全域に広がり，さらには全国へも良い事例として発信できる。

#### イ 育成する人材像

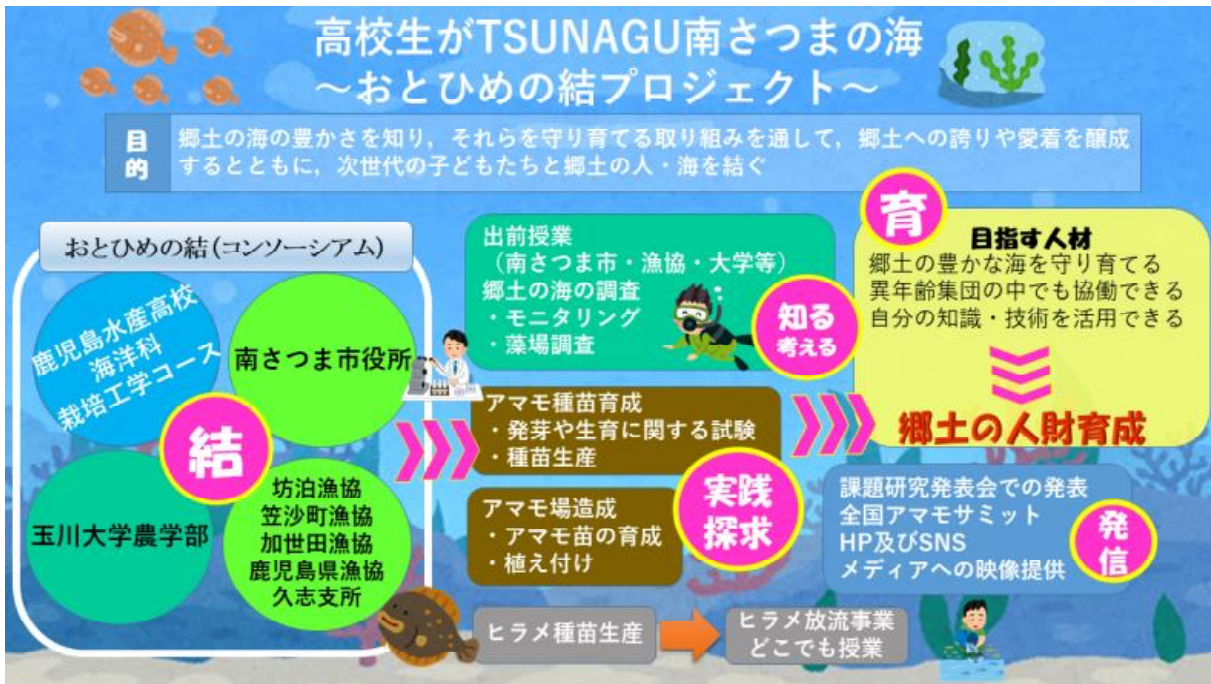
郷土の海に関心を持ち，郷土の海の豊かさを守り育てる意識の高い人材，また異年齢集団において，自分の意見をしっかりと主張しながらも，他者と協働でき，自ら学んだ技術を活用し，実践できる人材，自分の持っている知識・技術を他者に分かりやすく伝えようと努力できる人材の育成を目指す。

#### ウ 期待される効果

郷土の海についての興味・関心を持ち，アマモ場造成及びヒラメの種苗生産・放流を通して，郷土の海を守ろうとする意識を高めることができる。地域と連携し，学んだ知識・技術を活用する場を設けることで，自己有用感の醸成につながる。また，この取組の中で次の世代へも豊かな海づくりの精神を広げることができる。更に，地域と連携しながら活動することで，異年齢集団の

中で自らの想いや考えを発表し、自分たちの活動の意義を感じ、それを糧として今後の地域とのさらなる連携強化を図ることができる。それにより、地元の小学生が地域の海について興味・関心を持つきっかけとなり、地域の人材や高校生の頑張る姿を見ることで、次世代の人材育成につながっている。これらは、SDGsの「14 海の豊かさを守る」に該当する国際的な取組となり、それを発信することで県民に広く周知し、他地域での豊かな海づくりに関する取組を広げる。

(2) 事業のイメージ図



3 事業の経過

日	内 容	参加者
5月		
24日	アマモ花枝採取及び花枝腐熟作業	南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 笠沙町漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース3年生
26日	第1回郷土教育推進事業 担当者会	南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 笠沙町漁協 加世田漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース 職員

6月		
21日	ヒラメ放流実習及びどこでも授業	南さつま市笠沙小学校 南さつま市役所商工水産課水産振興係 笠沙町漁協 海洋科栽培工学コース3年生
8月		
10日	光合成細菌を用いた腐熟試験	海洋科栽培工学コース3年生
23日	アマモ種子選別・保存	南さつま市役所商工水産課水産振興係 坊泊漁協 笠沙町漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース3年生
9月		
19日	海と日本プロジェクト 海の宝アカデミック コンテスト2023への応募	海洋科栽培工学コース3年生
10月		
18日	アマモ場調査	南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース3年生
20～ 22日	全国アマモサミット2023inふくおか	海洋科栽培工学コース3年生
24日	出前授業及び漁業者との意見交換会 テーマ 「南さつま市の水産業及び海洋環境」 第2回郷土教育推進事業 担当者会	南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 笠沙町漁協 加世田漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース2・3年生
11月		
27日	アマモ苗床作成及びアマモ発芽試験に関する 現場指導	玉川大学農学部 南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 笠沙町漁協 加世田漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース3年生

12月		
19日	課題研究発表会	海洋科栽培工学コース3年生
1月		
10日	紙粘土を用いたアマモ種子播種	南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 加世田漁協 海洋科栽培工学コース3年生
12日	第70回鹿児島県青年・女性漁業者活動実績発表大会	海洋科栽培工学コース3年生
17日	活動報告会	玉川大学農学部 (Web) 南さつま市役所商工水産課水産振興係 南薩地域振興局 坊泊漁協 笠沙町漁協 加世田漁協 鹿児島県漁協南さつま久志支所 海洋科栽培工学コース3年生

#### 4 事業の内容

##### (1) アマモ花枝刈り取り及び花枝腐熟作業

鹿児島市与次郎ヶ浜長水路において、アマモの花枝刈り取りを行った。海洋科栽培工学コース3年生2名も作業に参加し、日頃学んでいるダイビング技術を活用して、潜水しながらアマモを刈り取ることができた(図1)。その後、刈り取ったアマモ花枝は約2kgごとに網袋に仕分けを行い、腐熟させていく(図2)。



図1 アマモ花枝刈り取り



図2 アマモ花枝腐熟

(2) ヒラメ放流及びどこでも授業

南さつま市笠沙町片浦漁港において、ヒラメ稚魚放流実習を実施した(図3)。放流したヒラメは、海洋科栽培工学コースの3年生が卵から育てたものであり、約5cmサイズのヒラメ約1,000尾を南さつま市立笠沙小学校の児童23名と一緒に放流した。放流に際し、生徒が先生役となって児童に授業を行う「どこでも授業」を実施し、ヒラメ種苗生産に関する授業を行った。生徒は、小学生からの予想しない質問に戸惑いながらも、これまでに自分たちが行ってきたヒラメ種苗生産について熱心に説明していた。この放流をきっかけに次世代を担う小学生に、地元の海に興味を持つきっかけとなつてほしい。



図3 ヒラメ放流実習

(3) 光合成細菌を用いた腐熟試験

玉川大学農学部講師佐々木慧氏に助言をいただき、光合成細菌をアマモの腐熟に活用する試験を実施した(図4)。光合成細菌は、液タイプ・リキッドタイプ・ビーズタイプの3種類を提供していただき、腐熟過程のアマモ花枝に添加することによって、タイプ毎に腐熟進度にどのような影響が出るか試験を実施した。結果としては、「ビーズタイプ」を使用したアマモ花枝が最も腐熟が進んで(最も重量が減少)おり、効果があるものと考えられた。



図4 光合成細菌を活用した試験

(4) アマモ種子選別・保存

本校栽培工学実習棟において、5～8月まで腐熟させておいたアマモの種子採取及び選別・保存を行った。当日は、コンソーシアムを形成するメンバーに協力いただき、腐熟させていたアマモ花枝(図5)を網袋から取り出し、花枝と種子に分別した(図6)。分別して花枝を取り除いたら、種子をよく洗浄し、遮光した容器に試験区毎に保存し、植え付けまでの期間、定期的に保存容器の水を交換しながら、冷暗所で保管していく。今回は、腐熟試験区ごとに「光合成細菌なし132g」「液体タイプ140g」「リキッドタイプ152g」「ビーズタイプ172g」の種子を得ることができた。  
\*試験区外の種子も含めると合計1,654gの種子を得ることができている。



図5 腐熟したアマモ



図6 アマモ種子選別

- (5) 全国アマモサミット2023inふくおか  
福岡県博多港国際ターミナルにおいて開催された「全国アマモサミット2023inふくおか」に海洋科栽培工学コースの生徒が参加した。このサミットは、「アマモ」と「アマモ場」を象徴的なキーワードとして海の自然再生・保全を目指して毎年開催されているものである。本校は、これまでのアマモに関する活動内容について、プレゼンテーション形式で発表する機会をいただいた（図7）。



図7 発表の様子

発表を担当した生徒は、大勢の観客を前に緊張しながらも堂々とした発表を行った。発表後の質疑応答では、司会進行をされていた同志社大学助教の榎太一氏にサポートされながらも、自分たちの活動内容についてわかりやすく伝えようとする姿がみられた。

- (6) アマモ場調査

南さつま市坊津町の坊泊漁港及び久志漁港において昨年度植え付けを行ったアマモの繁茂状況の調査を実施した（図8）。当日は、コンソーシアムを形成するメンバーにも協力いただき、合計2カ所の港で潜水及び水中ドローンによる調査を実施した。今回の調査では、残念ながらアマモが繁茂している状況については確認することができなかつたが、次年度の植え付けに向けて、適地選定等、課題を確認することができた。



図8 アマモ場調査

がみられた。

(7) 南さつま市による出前授業

「郷土の海について学ぶ」をテーマに南さつま市役所産業おこし部商工水産課及び南薩地域振興局に御協力いただき、出前授業を実施した（図9）。海洋科栽培工学コースの2・3年生30名が郷土の海について理解を深めた。出前授業では、南薩地域や南さつま市の海の現状や漁業及び郷土の海について学んだ。当日は、南さつま市の漁業者との意見交換会も実施し、南さつま市の海や海洋環境の変化について活発な意見交換を実施することができた。今回の意見交換会において、生徒たちは地元の漁業者が藻場の減少によって困っている状況を目の当たりにすることができ、本事業を実施する意義を改めて認識したようである。



図9 出前授業

(8) アマモ苗床作成及びアマモ発芽試験に関する現場指導

8月から保存していたアマモ種子の植え付けを行った（図10）。コンソシアムを形成するメンバーに協力いただき、苗床作成から種子植え付けまでを実施した。今回は、発芽率を良くすることを目的に光合成細菌を活用した苗床を作成した。苗床作成にあたり、玉川大学農学部講師佐々木慧氏に現場にて御指導いただき、アマモの種子植え付け及び光合成細菌に関する勉強会を実施した（図11）。今後、光合成細菌が発芽率及び成長に及ぼす影響について経過観察していく。



図10 アマモ苗床作成



図11 勉強会



(9) 第70回鹿児島県青年・女性漁業者活動実績発表大会

かごしま県民交流センターにおいて開催された第70回鹿児島県青年・女性漁業者活動実績発表大会で発表する機会を得た(図12)。発表を担当した生徒は、多少の緊張感があったものの、これまで発表する機会が多くあったことからその機会ごとに発表態度が洗練され、堂々とした発表を見せ、アマモ班として高校生活の良い締めくくりとなった。



図12 発表の様子

(10) 活動報告会

本校視聴覚室において、今年度の活動報告会を実施した(図13)。報告会では、これまでの活動内容やその成果を生徒が報告し、今後の活動内容や次年度に向けた課題等を話し合った。



図13 報告会

## 5 事業の成果とその評価

(1) 課題解決の現状

本事業1年目は、コンソーシアムを構成する団体と連携を丁寧にとりながら進めることができています。南さつま市役所、南さつま市内の漁業者においては、アマモ造成の取組を本校の実習棟やアマモ場を造成する南さつま市の海域など、お互いの拠点で活動したことによって、進行状況や課題について確認を密に取りながら進めることができた。生徒は定期的に関係者と協働した経験を重ねたことで、郷土の海について学ぼうとする意識の向上や漁業者と意見交換する頻度が増えている。さらに、校内で育成しているアマモの管理についても、生徒間の意見交換や教員への質問・意見などが増えるなど、日々の行動面で変化が見られた。

全国アマモサミットでは、本事業の取組の発表を通して、生徒の表現力や本筋を捉える力の向上につながった。また、同じ課題に向き合う団体と意見交換する機会もあり、取組の方向性を確認することができた。ここで受けた指摘や助言については、本事業を振り返る良い材料となっている。

本サミットの様子は、テレビ局や新聞社から全国に報道され、南さつま市や本校の活動を県民に広く周知することができた。また、アマモ造成と広報活動を通して、南さつま市役所や南さつま市内の漁業者と連携が強くなっている。今後も連携を深めながら、実績を積み上げること、生徒の郷土愛や郷土の海を守る資質と能力の向上を目的に事業を進めたい。

## (2) 評価

### ア 地域の活性化

本事業を通して、生徒は鹿児島県の海の豊かさや地域の海域の現状について、理解を深めることができています。特に南さつま市と協働して行ったアマモ苗の生産や移植では、コンソーシアムを形成するメンバーと定期的に交流する場を設けることができています。事業を行うことで高校生とコンソーシアムを形成するメンバーと信頼関係を構築することができたと感じている。また、本事業の取組をテレビや新聞などのメディアを通して、全国に周知することができており、地域の魅力をPRすることにつながっている。

地域の小学生を招いて行った出前授業では、「水産高校で勉強してみたい」、「水産業に興味を沸かした」など、地域産業の未来の担い手につながる意見が聞かれた。

### イ 人材育成

各取組を通して、主体的に考え行動する生徒が増えてきた。生徒の自己評価をみると、本事業の取組を経験するにつれて、郷土の海に興味・関心が高まっていることがわかった。生徒の感想では、「今まで意識しなかった海洋問題について気になるようになった」、「地元の水産業が将来どうなっているか気になる」など、郷土愛を感じるコメントがあったことから、地域の海を守ろうとする意識を育むことができた。

### ウ 生徒の自己評価

この取組では、「郷土愛」、「積極性」、「責任感」、「協働性」、「向上心」、「コミュニケーション能力」、の6つの要素について、アンケート調査（自己評価）を実施し、指導教員による行動等の観察から効果の測定を行った（表1）。図14は、この事業に参加した海洋科栽培工学コース3年生のアンケート結果をそれぞれ平均化してグラフにしたものである。事業前の全ての要素の平均レベルは1.7、事業後の全ての要素の平均レベルは2.3となり0.6の上昇となった。この結果の妥当性については、次年度の結果も交えて評価する必要がある。各要素は概ねレベル2を達成することができたが、コミュニケーション能力については、厳しい評価をつける生徒が多かった。この背景として、コミュニケーション機会の差が考えられる。アマモサミットや報告会で発表した生徒については、発表練習や本番などで多くの機会を得ており、レベル3や4など高い評価をつけていた。他の生徒は、実習を通して、市役所や漁業者と交流する機会が多かったものの、主体的なコミュニケーションは少なく、レベル1や2など低い評価が多かった。本要素を向上させるためには、生徒の情報発信の場をさらに改善する必要がある。

各取組の結果を図15～17に示す。大きな変化が現れたのは図17の出前

講座である。事前の結果も全体的に高い。出前講座は、3つの取組の中で終盤に実施されたことから、各取組で培ったスキルが積み重ねられた結果、事前・事後ともに高い水準につながったと考えられる。

表 1 ルーブリック評価表

鹿児島県立鹿児島水産高等学校 郷土教育推進事業・人材育成ルーブリック

身に付ける資質・能力	Level 1	Level 2	Level 3	Level 4
郷土愛	郷土の海に興味・関心を持った	郷土の海が抱える課題について考えることができた	課題解決に向けて、自身の考えを持ったり、他者と議論することができた	課題解決の議論を通して、自身の考えや行動を振り返り、郷土の海を守る自覚が芽生えた
積極性	物事を前向きに捉えることができる	自分を意味ある存在として考え、物事を前向きに捉えることができる	自分を意味ある存在として考え自信を持ち、物事を前向きに捉え、主体的に取り組める	集団や他者との中で、自分の役割を見つけ、自分の意見を積極的に語りながら、物事を前向きに捉え、主体的に取り組める
責任感	自分の役割を、責任を持って取り組むことができる	自分や集団の役割を、責任を持って取り組むことができる	困難にぶつかっても、自分や集団の役割を果たす努力をし、困難克服のために責任を持って行動できる	困難にぶつかっても、逃げずに自分や集団の役割を責任を持って果たし、失敗してもその失敗を糧とできる
協働性	集団や他者との中で、決められたことや指示されたことに一人で取り組むことができる	集団や他者との中で、自分の役割を見つけ、個性を生かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる	集団や他者との中で、他者の良さに共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる	集団や他者との中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる
向上心	自分を向上させるために、自分自身で目標を立てることができる	自分を向上させるために、自分の目標と現実の差を見つけることができる	自分の目標を現実近づける方策を考え、自ら行動することができる	自分の目標達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら学び続け、次の行動に繋げて取り組むことができる
コミュニケーション力	自分の意見や考えを集団の中で話すことができる	突然指名されたときでも臆せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように話すことができる	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら、分かりやすく伝えることができる	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って腑に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる

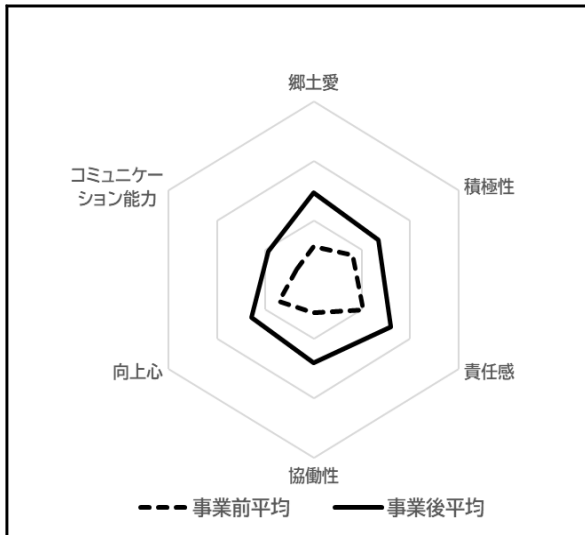


図14 事後事前の平均値



図15 放流・出前授業前後の変化

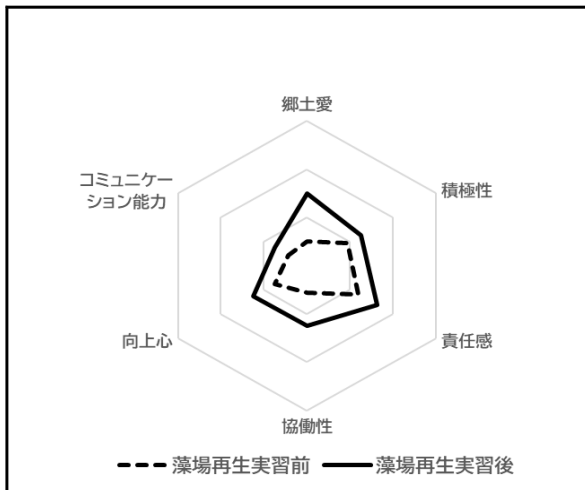


図16 藻場再生実習前後の変化

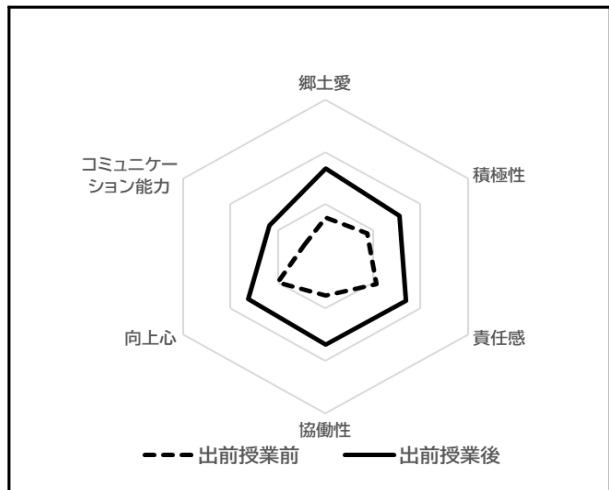


図17 出前講座前後の変化

## 6 今後の課題

これまで南さつま市と独自に取り組んできたアマモ場再生に関する活動について、今年度から郷土教育推進事業として取り組んだ。本取組は、南さつま市海域を中心としたものであり、活動範囲が広範囲であった。しかしながら、コンソーシアムを形成してスムーズに活動が実施できたのは、本事業と同時期に発足した南さつま市アマモ協議会の存在が大きい。同協議会が、各漁業者への連絡・調整を担ってくださったこともあり、各活動においては、南さつま市管内の漁業者が積極的に活動に加わっていただいた。生徒たちも日頃接することのない方々の中に混じり、話をしながら活動を行うことができた。生徒にとっても漁業者から直接話を聞き、本校生に対する期待や助言をいただくことで、本事業での活動の意義を理解することにつながり、新たな人と人のつながりも持つことができた。そのよう

な中で高校生がつながりをつくり、各種研究発表の場ではコンソーシアムを形成するメンバーが応援に駆けつけてくれたりと、生徒にとっては実習以上に得るものが大きく、自己有用感の醸成につながった。

今回の事業の主な研究対象となっているアマモの最盛期は、3～6月である。1年間の研究成果が出る時期が年度をまたいでいるため、年度ごとに成果報告をしているとなかなか成果が見えづらい面もあり、発表を行いくにくい。また、生徒についても活動の主体が3年生であることから年度末での活動が厳しい面がある。年度当初からの活動に2年生も組み込み、3年生と同様に活動に関わるとができること、教育効果も一層高まるのではないかと考える。3年生から2年生への研究主体の移行や・引き継ぎをスムーズに行い、本事業の研究が途切れることがないように留意していきたい。本事業によって産官学が連携したコンソーシアムを形成し、郷土の豊かな海作りを目指した活動ができる基礎を築くことができたことは大きな成果である。単年度で終わることなく、今後も活動を継続し、南さつま市の海に豊かなアマモ場を作ることができるように地元の方々と共に今後も取り組んで行きたい。

## 7 協働先一覧

No.	協働先	所在地	主な内容
(1)	南さつま市役所産業おこし部 商工水産課	南さつま市	①②③④⑤⑥⑦⑧ ⑨
(2)	南薩地域振興局林務水産課	南さつま市	①②⑤⑥⑦⑧⑨
(3)	坊泊漁業協同組合	南さつま市	①②④⑤⑥⑦⑧⑨
(4)	笠沙町漁業協同組合	南さつま市	①②③④⑥⑦⑨
(5)	加世田漁業協同組合	南さつま市	②⑥⑦⑧⑨
(6)	鹿児島県漁業協同組合 南さつま久志支所	南さつま市	①②④⑤⑥⑦⑨
(7)	玉川大学農学部	東京都町田市	⑦⑨

主な内容

- ① アマモ花枝採取及び花枝腐熟作業
- ② 第1回郷土教育推進事業担当者会
- ③ ヒラメ放流実習及びどこでも授業
- ④ アマモ種子選別・保存
- ⑤ アマモ場調査
- ⑥ 出前授業及び漁業者との意見交換会・第2回郷土教育推進事業担当者会
- ⑦ アマモ苗床及びアマモ発芽試験に関する現場指導
- ⑧ 紙粘土を用いたアマモ種子播種
- ⑨ 活動報告会

8 その他（新聞記事等）

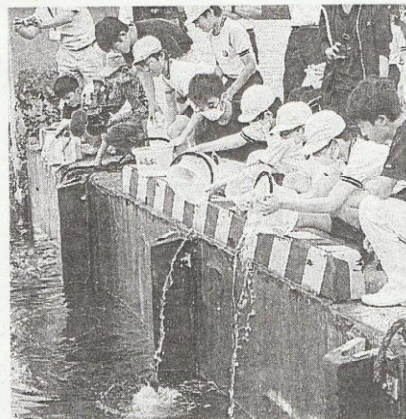
水産高校生と笠沙小児童がヒラメ稚魚放流



今年度から鹿児島水産高等学校が市や市内漁協と取り組む「郷土教育推進事業」の一環で、6月21日、笠沙小学校児童を対象に「高校生による出前授業」が行われました。水産高校3年生が児童へヒラメの生態について教えた後、高校で育てたヒラメの稚魚1,000尾を笠沙町片浦漁港へ放流しました。笠沙小卒業生でもある水産高校の大原慶士さんは「母校の児童が今回の放流をきっかけに海や魚に興味をもってもらえるとうれしいです」と話しました。

南さつま市市報 令和5年8月号

◆笠沙小児童が放流体験 南さつま市笠沙の片浦漁港で21日、水産体験学習があり、地元の笠沙小学校児童23人がヒラメの稚魚約1000匹を放流した。稚魚は鹿児島水産高校（枕崎市）の生徒が育てたもので、同校生16人がヒラメの特徴などを説明した。南さつま市、同水産高、笠沙町漁協の共催。6年の有留悠生君は「ヒラメの赤ちゃんは小さくてかわいかった。大きく育ててほしい」と話した。



がヒラメの稚魚約1000匹を放流した。稚魚は鹿児島水産高校（枕崎市）の生徒が育てたもので、同校生16人がヒラメの特徴などを説明した。南さつま市、同水産高、笠沙町漁協の共催。6年の有留悠生君は「ヒラメの赤ちゃんは小さくてかわいかった。大きく育ててほしい」と話した。

南日本新聞 令和5年7月1日

アマモの種子の植え付けをする生徒＝枕崎市の鹿児島水産高校



枕崎市の鹿児島水産高校海洋科栽培工学コースの3年生16人が、アマモの種子を育苗ポットに植え付けた。魚のすみかとなり海水の浄化にも役立つ藻場造成の取り組みで、昨年度から南さつま市の漁業者らと活動して

豊かな海へ藻場造成 鹿水産高生ら研究

植え付けは11月27日にある。今年度は土壌の栄養や環境保全に役立つ光合成細菌の効果を調べるため、粒状や液状など異なる状態で混ぜ込んだ培養土を用意。玉川大学農学部佐々木慧講師（39）の技術指導で、ポット約500個とプランター30個に、種子を植え付けた。今後はアマモ班の5人を中心に管理。海水の入った水槽で3〜4カ月間育て、坊津などの海底に移植する。班長の有馬理恵さん（17）は「アマモの藻場造成は全国的に注目されている。しっかりとデータを取って今後の研究に引き継ぎたい」と語った。

（下栗淳也）

南日本新聞 令和5年12月7日